





馬の上

龍の如く一帯のらむにたかきしめしは海にたかきしめし  
とくもあつてしむるにむらさきもたかきしめし  
は利志も夢のつらきしむるにむらさきもたかきしめし  
波の心もあつてしむるにむらさきもたかきしめし  
るて板かうしむるにむらさきもたかきしめし  
れおもころあつてしむるにむらさきもたかきしめし  
海にあつてしむるにむらさきもたかきしめし  
語をたかきしめし

かたきしめしむらさきもたかきしめし

かたきしめしむらさきもたかきしめし

かたきしめしむらさきもたかきしめし

かたきしめし

かたきしめし







それ馬鹿に云ふは山男は多物もなきて  
 あやのめを後のほうにのこひだりからかき  
 をはさの大口もむりとうちひ様よむにたう  
 うららむいふにたむいふくおのりゆへんあな  
 たをと斗つてさうくゆる又の目を山男をれ  
 赤きとさうけちなくおれくるあぞそれけをど  
 けさのたおれ命をかさうりゆにいらぬらんと見  
 一おとつあわくとたつひさすは男うも  
 為さつちやうもまゝあまをたぬ路にいら  
 候一たるあそとらうあれ醜醜ろくと云  
 物よとらけ沈のやうにらうあらふ文(世へあ  
 目のこく志て休せらまかへるゆあまのよま

るのこ家のあや一はまらへまらうとあや海を  
 のて海にむいもいももたらうとくはつ  
 そのむいふらうむの海をたまきふる  
 海そのたまけらそありかへくあまかられ結  
 きてらるる人のかへら

下野國是利の学接ハ淳和天皇長九年ハ草創より  
 して九百八十二年ハ旧地後今灰丈庫の遺書ハにら  
 一なせらう一あまを東魯津所の名む一くか  
 これとむいふらう一老おあり昔学共を解れ又  
 字あるとはのこた結をま不除ふととらけりそ  
 くのあまむいふ一ヤウ一とらや姑射の雪た潤  
 まに蘭臺の絶たかへら一まらにまらう











陸奥屋のやまの若れはあけり  
 うらむしうらむしうらむし  
 基風の小舟あつて面白  
 中郡おちむくありくあり  
 捲川の男のあかしの若れ  
 まづうらむしうらむし  
 昔もたたく面白のちうま  
 秋葉の律とつらまはへら  
 おくまよふ若れをふたさ  
 人のあまむく酒をうらむ  
 大伴後の娘う足の腰の  
 葉鴨の所れおをさしむら

半渡き 半渡き 半渡き 半渡き 半渡き 半渡き

こそそそれの極にさるるの月をえ  
 勝も小舟も敷りさるる  
 いつからうらむのちうま  
 香葉たてにうらむ  
 うらむもまづ面白  
 小舟の縄をたよひりうけ  
 ちうてうらむをさしむら  
 ちからぬ身もあかしの月

中宮のうらむの若れはあけり  
 もとあかしの若れはあけり  
 そらひらきよかりはあけり  
 ひらきよかりはあけり

半渡き 半渡き 半渡き 半渡き 半渡き 半渡き



















あつちまうりなむ翠の唇よ人を花ひきまを  
やうしをば葉のあけ下ちうき波の月とら  
ほらうなむ

村と入屋

藤原みさるを迎

あゝそこの花をよまけりうき

つるま

あろくくこの梅の夕月

長翠

葉の陽光に影のまよこのまを

ま

ほのちをよをあげ一歩に

翠

笑かゝる葉の花の風さけり

ま

ゆのちをよの光を照しき

ま

首の骨格のこわくうき

翠

まをうけをよをたかくぬけ

ま

まをまのまをよを青をよをまを

ま

松をよをまをよをの利根を

ま

月の麻糸にうき北より

ま

まをまのまをよを換を

ま











志遠人皆うる酒のさへらわ  
羽織忘るく霞半ハ法のさう  
捨子の靴とあや〜まねける  
人の萩んる貝さ萩の枝ありて  
萩の穂をうらに麻痺す月  
萩穂をわのうはよほらふらん  
降よ勇進ささるるさ  
まらんそもえ〜くろらぬ大徳も  
松葉ふらけハおら〜さ  
〜虫のこけりと落〜日盛ふ  
古〜萩のもろなからか  
い〜あ〜た〜ぬ〜む〜の〜

志 翠 翠 翠 翠 翠 翠 翠 翠 翠 翠

笑ふて〜萩のやま〜風

翠

吟ふあうりささるあえのゆり  
二月ら〜や山のさのち  
さ〜ぬ萩の花ハゆ〜まねて  
ゆ〜もあ〜も皆 翠 守  
二折よほ〜月月の芦 翠  
ま〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜  
並まのほは萩のうそ〜み  
せ〜く〜は〜は〜は〜は〜は〜  
卯の夜〜か〜か〜か〜か〜  
中津さ〜〜〜〜〜

双鳥 翠 翠 翠 翠 翠 翠 翠 翠 翠 翠 翠

中津

四十一















烟芥附錄

先を旬と法くらんと考へ何の歌めてあまたと六洲  
もろろ夜ぬとも一火清純月まらふ而待あり  
つるど百人が百人の草ふれ其あて百年れ今目に出  
てかきより外は法くらぬめとえさる迷と打破るの地  
老事との心ゆるるどまの一字の眼目の処ありとまのやと地  
たささる八取中さるぬると氣象流流とゆりくとさる  
その氣象とまさる時六十字地の排流ゆめてむ  
るりかしたるもんえさるど一あ又かき古さる流流と道  
具とまの附々五七五の内必まのゆり成さるあら  
まはあゆめらうかゆらとと裏法よと一みて後よ  
まの容易さるる貴折ゆて一向にせし知と合とまらる



人事より公家の海へまゝく鴨の交はぬのたの白とありし  
 白と海をそめてのふ白く鴨の交はぬとありてありし  
 白らぶとありしとて死別十文字作られ海ゆき昔  
 まを死心より白作といふのを并ぶる人處を交念のむら  
 許六日を白と取名をその作を時より多く出するの之初  
 学の輩これとあへて功者よ及びるる取合ふる合はれ  
 中あはる又書るの曲編を花を作すべしとありし  
 よる死のその自體麻れけけのわん天を死にてもあはる  
 まま白を白と曲編の中にあはるのふあつあはれに真  
 感傷をとり物多ハ内よあはれれどもあはるあはる  
 まをわくまの古人の糟粕うらむ南のけりて吟まらる  
 白まきのころるふとすし等歌とのから物作れむわりの死

とありしといふと海へまゝく

風雅の意は詩歌連体古今同く真にて古人のよあはれを  
 味して其後たふはるのこまふ白と作らるる貴  
 と修行の成るをえて其後らうあはるる後たふを  
 あつとまはるの白と作らるるあはるるむら人の  
 をまゝく海ゆきの其まのくはるるるるるるるる  
 はるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる  
 酒ねまらるるるるるるるるるるるるるるるるるる  
 小ころるるるるるるるるるるるるるるるるるるる  
 人れまをかうとありしとてあはるるるるるるるるる  
 のかひひあはるるるるるるるるるるるるるるるるる  
 とはるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる







足すのいろはあけたりをの財

とやとやう〜る類句の句

あちこのやとやとをさるる山つき

ハ九月風やしろこのあちの貝

名月れせりや五十一箇條

右云為る春時仁毫と名とく  
改むを致せとことく書あり

あちくとはまたる句

母のせせと〜入もほり〜

菜の花や一幸候〜物のみと

庵れ〜たも〜かくさぬが〜

雨の日やの挽〜りか〜らなる

山梅

嵐雪

芭蕉

神奈

宗因

風雪

信流

地のみぬぬをそかけ〜る梅う那

冷くと〜を〜ま〜て〜を〜

古元紙のさ〜五七の肉〜く〜言葉あり

ぬ〜は〜あ〜て〜我あ〜ら〜なる句

鳥飛う。その〜を〜た〜り〜

お〜と〜七〜日〜を〜た〜る〜

も〜の〜は〜さ〜て〜と〜笑〜る〜

冬〜か〜れ〜の〜残〜よ〜を〜た〜る〜

あ〜ら〜海〜や〜佐〜後〜に〜換〜た〜る〜

管〜火〜や〜響〜の〜は〜を〜た〜る〜

友〜つ〜ま〜の〜舟〜に〜乗〜つ〜ぬ〜

許六

芭蕉

名張

文學



菜種売たぐや。井田のやぐまに  
あ。底をさるる。其の底の小鴨水  
脊。戸にの入。はよのや。子き水  
鳴。ぬ。る。よ。ま。一。よ。の。あ。ま。ま。た

病中

あ。う。も。花。ん。の。う。ま。ま。る。元  
そ。ま。ま。う。て。夜。風。鳥。や。海。鳥  
の。室。う。あ。ま。あ。の。ま。の。あ。わ。け  
又。ま。や。い。ろ。ま。ら。い。た。ま。の。系  
大。切。る。夜。ま。め。う。う。そ。れ。川  
紅。小。う。穴。の。底。れ。自。う。水  
酒。雲。う。り。を。あ。ま。の。居。一。ッ

そ角

菖のまに。挽。付。や。ほ。り。系  
ま。む。月。や。雲。を。さ。る。ま。り。に  
炭。う。す。や。煙。を。ぬ。け。か。換。れ。ま  
お。身。や。衣。を。む。く。あ。の。ま。ち。宿  
号。も。や。ま。た。り。や。あ。ま。ま。に  
う。の。花。の。た。え。お。ん。男。の。口  
山。雀。の。甲。か。や。ま。ま。ま。時。由。は  
お。う。り。存。も。よ。死。者。と。し。初。子。の。目  
く。ま。り。く。と。猫。の。毛。や。梅。の。花  
清。水。の。う。う。あ。う。ま。の。月  
血。と。う。が。す。う。の。厚。の。麻。や。む。芒  
初。雪。や。初。雪。て。あ。ん。う。人。の。墓

去来

許六



をうすく切らむ里の葉けり邪

尚白

右のこもむきまきまらつ蓋をさうら  
と産つる蓋を味く厚

夕鳥の扇根よ揃りた来らる  
名月六増も及らぬ指く南  
炉ひらきまの目とまの葉の土葉の  
松風の里ま教まらるるまらる  
萍よ何を喰らやう池の鴨  
きく雲かまらまらまらまら  
雲の玉りり持つるまらまら  
秋の井を枯ひらけりまらまら  
たの死を身うちつげく鳴

嵐雪

鬼貫

李由

唇りよけに海系遊本も小葉如

支考

まらまらまらまらまらまら

そまの花まらまらまらまら

三日月や雲にまらまらまら

花城

静さや梅の苔まらまら秋の障

赤子まらまらまらまらまら

まらまらまらまらまらまら

李由

鏡あらまらまらまらまらまら

本導

待たまらまらまらまらまら

花水

いづまらまらまらまらまら

子那

滑りいりまらまらまらまら

信法

落葉まらまらまらまらまら

田六丁



蚯蚓。或は或は。堅田の巻。或  
 来る。或は。或は。吉浦の。是の。あど  
 多の。其の。或は。是の。おし。さる。まろく。を  
 家。形も。まよ。いん。ある。枯。中。い  
 身。く。の。小。お。よ。雪。の。ゆ。り。り  
 け。ら。白。も。た。ま。ま。ち。す。津。の。ま。や。ひ  
 あ。の。ま。や。ま。よ。む。を。さ。ま。り。く。を  
 海。ぬ。き。も。松。風。竹。た。り。り。ら。ら。ら  
 え。お。や。ゆ。と。る。ま。ま。と。ま。さ。く。と  
 然。自。や。り。の。ち。と。う。さ。う。さ。う。た  
 何。多。の。か。さ。し。い。ま。ん。ま。く。の。故  
 乙二道彦論

昌房  
 来山  
 荷兮  
 尼智月  
 且菜  
 胡及  
 徒吾  
 水通  
 次  
 曾良

柏葉堂野田藏板書目録

四書集注 全十冊

道春點最勝堂板

世に四書板行板多ありといふも細字より誤字多し今新板の字を傍堂の板と誤字を改む大字より素讀より文上り存あり

辨道辨名 全三冊

祖徠先生著

同考注 全五冊

瀟水先生注 本田文卿補校

合刺文淵詩源全一冊

祖徠先生口授 星陵先生校

辨道標注 全一冊

小木子衡編輯

小丘園詩集

秋元達之進著 全五冊







生古流  
花 ひとりけい  
古田松堂著 全一冊  
師と求むる一花をいけり  
る油さしたる下の信末と果  
あつてしる

同 後編 全一冊  
同 著  
前篇にもれたるいけり  
くちる

正風遠州流  
挿花衣香後編  
貞松齋 米一馬撰 全四冊  
四季混雜二百有餘瓶  
圖式と何れり

正風挿花  
遠州流  
ひとりけい  
貞松齋 米一馬撰 全一冊

同 後編 同 著 全一冊  
初らねど中々さかひる  
もて花作とていけり  
らやうたあつていけり  
体たれく、果とあらり  
りし、いけり  
まけり

正風遠州流  
挿花衣香口傳抄  
貞松齋 米一馬撰 全一冊

此書は花のいけり  
たる、花のいけり  
りていけり  
いけり  
を記す

挿花月乃夏 正風遠州流 全四冊  
窓月齋 鷹一由  
貞月齋 鷹一堤  
挿花の古者より数多き  
もの遠州流にその中にも  
あえりあつたては、  
そとにちよとていけり  
書よるも、花のいけり  
よちんあつたては、



遠州流 挿花百瓶圖式 四季混雜百瓶の圖式  
如月庵一太房馬丈撰

芭蕉翁 俳諧七部解大鏡 全八冊

古今の注釋諸家の愚痴悉く雜傳の題  
難事三つにとは切字の秘況並月死の愛の事  
跋文章故事方言乃至といふや初心も抑々  
解けたらとてを 忠告うま俳道に飛越

伊字まゝの巻 八采園主人附合  
著の國語文訂撰 全一冊

俳諧續猿蓑注解 完一冊

又木堂公石著 月院社考訂  
此集の祖翁滅後の著述を七部大鏡より  
去りし百余年用事あるもの解し  
白くこれと七部 貞介の著し  
少くともそのもの

芭蕉翁句解参考 月院社藏 全五冊  
月院社何九著述

俳諧萬本集 全二冊  
金令舎道彦大人 一代の發句集

同 後編 全二冊  
前編よりれたる  
多なる集 近刻







和詩集

白山玄武大人著 全二冊  
本朝文鑑和漢文藻のこと  
かき詩とそらひ

契れ細道

半紙本 全三冊 掠窓可丸編  
畫圖入

前板磨滅汚字ありしを今再校し、海の紀り中此  
月之條と想像し、一百年前のみし、一と改めり

大黒寶囊記

五菴山藏 大黒天傳各のりやう  
全壹冊 又其世おし事

七夕草露集 全二冊

七夕の由來傳ありし  
終終いし

佛説十二頭陀經

帙入 全一折

字畫 常用間合覺書

珍本全一冊  
近々出版

一諸人書取を子形世交行書ふはり平生はくち葉  
とて書付ともて用ひたはるるをききよしりおもひしり  
又字を長居くはる物とよと書し書家のつめおけおはるるの  
又字とあり川島在篇冠構字を倭かな四十七字に正字片  
うもる字も百方あるとて、大りか國を郡身十禮五常  
三徳の解且書業もも紙文をききもきりのおれくま  
るありし書業を又字のりも解し、くまをりきりりた書

朶雲

黎明

校割

八打

湛

給

濃

右のれれも作し、あし、小冊なるれ、懐中、のり、中へいれれ、を、即、中の、り、よ、合、ま、さ、る、る、事、あり



大學原文  
同集義

矢部保惠著

全三冊

文寶具節用集

大紙三ツ切

節用集世に扱多きものと云ふも小冊

全一冊

之れを文字少く大冊なれば扱に  
不弁理又文宝節用ハ程よき中冊

殊にいろはまを十二門部と云ふは每二画と云見女上志あり  
古語より文為宝依て歌号と云り

文政十三年 庚寅 三月

東都書林

日本橋通二町目

野田七兵衛 板



